

6. ツバメとの共生に向けて

6-1 ツバメの指標する人間の理想郷

ツバメは、その繁殖を人間の目で行う唯一の野生動物である。繁殖場所は、日本では人工構造物でしか知られていない。しかし、餌は飛翔昆虫であるため、採餌場所は河川等の水辺、樹林、草地、農地等を必要とする。つまり、図 6-1 に示すように、人が住んでいる場所であって、かつ自然がある程度の残っている場所が良好な生息環境となる。全く人のいない自然の中にも、逆に自然の全く残っていない高度に都市化が進んだ場所にもツバメは少ない。

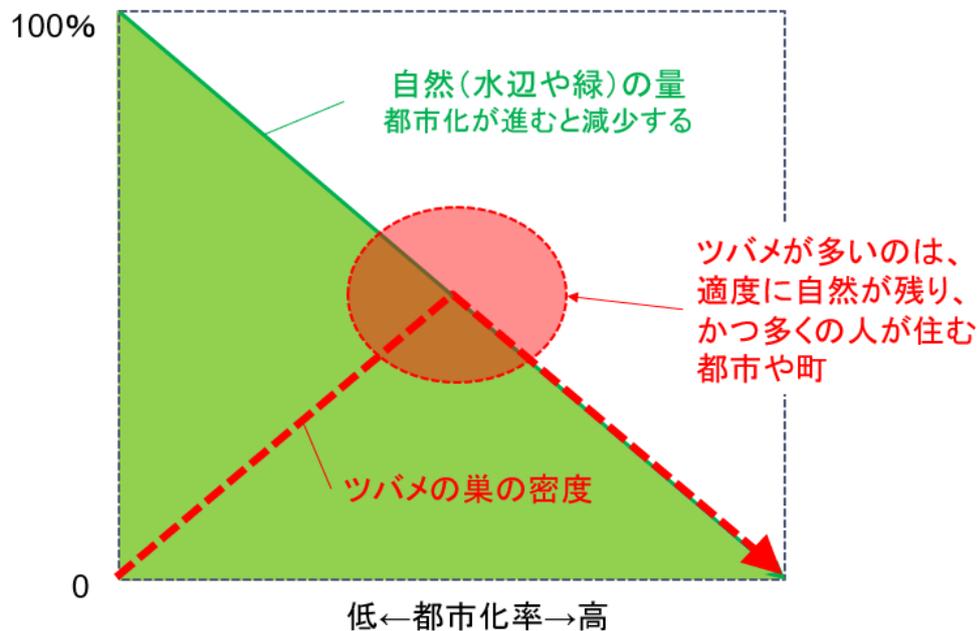


図 6-1 ツバメの巣の密度と都市化の関係

一方、ツバメが繁殖しやすい環境かどうかは、自然と都市化だけが要因ではなく、人がそれを受け入れるかどうかも重要である。日本においては、ツバメはその訪れで春の訪れを知り、子孫繁栄や商売繁盛の縁起物として、あるいは田畑の害虫を食べる益鳥として、家や商店に巣を作るツバメと共生してきた。今回の調査を通して、ツバメの来訪を楽しみに待つ市民が多くいる一方、残念な事に、長く続いてきた人とツバメの共生関係は危機にある事もわかってきた。ツバメについての古来の言い伝えはあまり伝承されておらず、近年の衛生観念の向上で巣やフンによる汚れを嫌がったり、鳥インフルエンザを恐れて(実際にはツバメからの鳥インフルエンザの感染リスクはほとんどない)巣を落としたり、巣が作られないように対策を取っている人も増えている事がわかった。今回の調査では図 6-2 で見られるように、ツバメが好む場所に、突起構造の構造物やテープを貼る等の例が散見された。



図 6-2 市内におけるツバメの営巣対策

以上より、ツバメが繁殖するのに必要とする条件は以下に示す3つであると言える。

- ① 自然の豊かさ（河川等の水辺、樹林、草地、農地等）
- ② 人のにぎわい（建物があり、人がいることで天敵が近づきにくい場所）
- ③ 人の心の豊かさ（ツバメを受け入れる寛容さ）

この三つの条件とは、ツバメにとってだけでなく、人が住む上での理想の場所と言えないだろうか（図 6-3）。ツバメが住める街作りをする事は、人にとっての理想の街作りをする事とも言えるかもしれない。

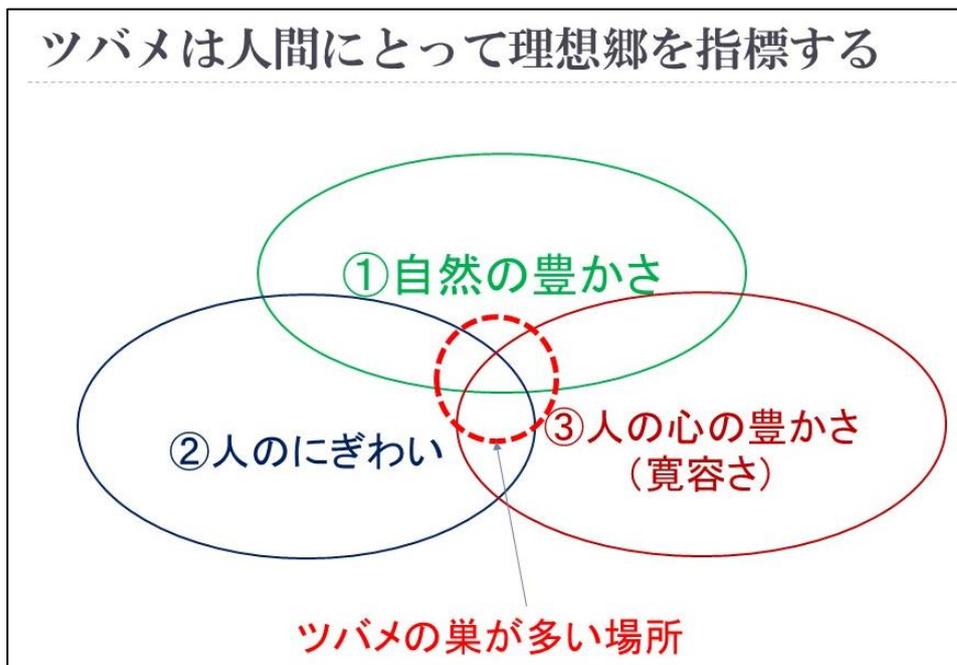


図 6-3 ツバメが示す環境指標

6-2 共生のための工夫

二カ年の調査においては、ツバメと工夫して共生する試みも見られた。ツバメのフンで汚れないようにフン受けを設置したり、ツバメが巣を作りやすいように巣台を設置したり、カラスが近づけないようにカラスよけを設置したりする例が見られた。また、ツバメの巣が落ちてしまった後に、発砲スチロールで代替巣を作ってヒナを入れて、無事巣立たせた例もあった。店の内側にツバメの巣を受け入れたクリーニング店もあった。(図 6-4)



図 6-4 市内におけるツバメとの共生事例

このように、衛生的な生活かあるいはツバメを受け入れるかは、どちらか一択ではなく、工夫によって両立する事ができると考えられる。

例えば、フン受けを設置してフンが落ちないようにしたり、巣を作ってほしくない場所から、別の場所にツバメを誘導するために人工巣を設置したりする事も共生のための解決策として考えられる。

そこでツバメ調査団では、図 6-5 に示す通り、平成 29 (2017) 年 3 月 12 日にツバメ人工巣・フン受けワークショップを開催し、これらを作成する事で、ツバメとの共生を推進する事とした。フン受けは調査団の市民調査員のデザインで、市民から理解を得られやすいイラストを用いた。

ワークショップで作られた人工巣は、図 6-6 に示す通り、多摩市役所やパルテノン多摩に設置された。残念ながら調査期間中に使用される事はなかったが、同様の構造の人工巣が調査の前から設置されていた東寺方小学校では、図 6-7 に示す通り、平成 29 (2017) 年にツバメに利用された。



市民調査員デザインのファン受け



ワークショップの様子

図 6-5 ツバメ人工巣・ファン受けワークショップ(2017年3月12日)



市役所東庁舎に設置された人工巣



パルテノン多摩の人工巣説明版

図 6-6 市の施設に設置されたツバメの人工巣



図 6-7 人工巣で繁殖したツバメ(東寺方小学校)

7. 今後の課題

7-1 さらなる調査結果の解析

本調査により多摩市における貴重な自然情報が記録されたと考えられる。これだけの精度で、ツバメ類の30年の変化を追った事例は日本にほとんどないと考えられる。本報告書は最低限の調査記録であり、30年の環境の変化とのツバメ類の関係については、さらなる調査結果の解析を進める事が望まれる。

7-2 モニタリング等の市民活動の継続

本調査はボランティアの市民調査員の献身的な努力により実施された。調査や報告会を通して、調査員のみならずツバメに関心のある市民が増えたと言えるだろう。これを一度きりの調査とするのではなく、継続的なモニタリング調査を実施していく事が望まれる。

本調査のような市内全域の調査は、相当な努力量が必要なので、高頻度で行うのは難しい。そこで、地域や時期を限定した調査を継続していく事が一つの手法として考えられる。

また、コシアカツバメ、イワツバメ、ヒメアマツバメについては、ツバメと比較して調査精度が高くないと思われる。市内全域を対象に、同時に4種の調査を行うのは無理があったかもしれない。これら3種については、引き続き調査を実施し、自然情報を蓄積していく事が望まれる。

長期的には、ツバメ類の30年毎（可能なら10年毎）に同様の調査を実施して、自然情報の変化を追跡していくことが望まれる。

7-3 生物多様性地域戦略への展開

多摩市は、平成29（2017）年に『多摩市生物多様性ガイドライン～もっと多摩の自然を楽しもう～』を発行している。今後、このガイドラインをグレードアップし、生物多様性基本法に基づく生物多様性地域戦略を策定し、多摩市の生物多様性の保全と持続可能な利用を図るのが望ましいと考えられる。

ツバメは前述した通り、環境指標性の高い生物であり、生物多様性地域戦略策定の上でも重要な情報となると考えられる。

また、地域戦略策定にあたっては、ツバメ類だけでなく、本調査で得られたノウハウを活用して、他の生物を対象とした市民調査に展開し、市民の生物への関心を高めるとともに、生物情報の充実を図っていく事が望ましい。

8. 参考・引用文献

- ◇ 環境庁（1997）ツバメ調査結果, 第5回緑の国勢調査 '97 身近な生きもの調査結果
- ◇ （財）せたがやトラスト協会 野鳥ボランティア（2002）世田谷のツバメ5年間の記録 東京都世田谷区「ツバメの繁殖分布調査報告書」
- ◇ 多摩市（2013）多摩市都市計画マスタープラン～安全で活気と魅力あふれる都市 多摩～
- ◇ 多摩市（2027）多摩市生物多様性ガイドライン～もっと多摩の自然を楽しもう～
- ◇ 多摩市文化振興財団（1988）みんなでつくった多摩市ツバメ地図
- ◇ 千代田の野鳥と自然の会（2001）千代田のツバメ繁殖調査報告書
- ◇ 中村登流・中村雅彦（1995）原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞
- ◇ 日本鳥学会（2012）日本鳥類目録改訂第7版
- ◇ （財）山階鳥類研究所（2002）鳥類アトラスー鳥類回収記録解析報告書（1961-1995）
- ◇ 八王子・日野カワセミ会20周年記念事業記録誌編集委員会（2006）数え上げた浅川流域の野鳥 2
- ◇ パルテノン多摩（2010）多摩のどうぶつ物語
- ◇ Angela K. Turner（2006）The Barn Swallow

印刷物番号 31 - 63

平成 28 (2016) ~平成 29 (2017) 年多摩市ツバメ調査
報告書

-多摩市のツバメ 30 年の変遷-

発行 令和 2 (2020) 年 3 月

著者 多摩市ツバメ調査団 渡辺仁

発行者 多摩市環境部環境政策課

多摩市関戸 6-1 2-1

TEL 042-338-6831

FAX 042-338-6857